

詩集
雪明りの路

伊藤 整 著

椎の木社

詩集
雪明りの路

伊藤 整 著

椎の木社

雪明のり路

大正十五年十一月二十五日印刷
大正十五年十二月一日發行

【定價 一圓五十錢】

北海道忍路郡鹽谷村八十五番地

著者 伊藤 整

東京府下中野上町二七五六番地

發行者 百田 宗治

北海道小樽市港町十五番地

印刷者 新井 龜之助

東京府下中野上町二七五六番地

發行所 椎の木社

振替 東京六七八五六番

序

詩集を出すことなど考へもしなかつた私も、自分の爲のこの小さな記念碑をたてる事になつた。

考へてみれば十五六の年からもう七八年も私は詩を書いて暮して來たのだ。それは心細い寂しい不安な年月であつた。私は詩壇に一人の先輩も知友もなかつた。私が敢てそれを求めもしなかつたのは、たゞさへ自分を捉へることの面倒な詩の世界で、當然被るべき影響の爲に、自分自身を失ふのを何よりも恐れたのである。私が詩を書き始めた頃から詩壇そのものは、すでに一時代を経過してゐる。私はそれを遠く横目で見ながら、ごうしたら、何時になつたら自分自

身を捉へれるのかと、そのみの爲に苦しんできた。そして自分を信じることも無かつたが、どんな場合も詩をあきらめる事だけは出来なかつた。私が詩に頼り、私の詩情がまた、自信のない私に頼つて居る様であつた。今伊勢に居る歌人北見恂吉氏がはじめ私にとつて唯一の指導者だつたけれども、氏が歌に専念になられてから、私は全く獨りぼつちであつた。その結果として私は詩壇の流行の型に煩されずに來た。それを今でも私は私の小さな幸福等のうちの一つに數へるのである。私の長い間の苦難に對して、私は私だけの道を歩いて來たとばかりの誇は持つ資格があると信じたものだ。

此の詩集の大部分を色づけてゐるのは北海道の自然である。北海道の雪と緑とである、私の故郷は小樽市の西二里、高島と忍路との間

の鹽谷村である。私はそこに幼くから育ち小樽の學校へ通つた。その邊一帶は、北海道とは言ふものの、石狩の平野とか北見天鹽の方の自然林とは大分異つてゐる。木は落葉松が多く、栗、白樺などもある。海岸にそふて之等の木の繁つた丘陵が續いて居る。落葉松の葉は秋になれば皆黒く落ちてしまふ。草では虎杖いたぢが目立つて多く一丈近くになる、私たちは虎杖をどんぐい、いひと言つた。冬は十一月から四月まで雪が六七尺も積りその間私たちはスキーをやる。全く半年は雪なのだ。春は鯉場の仕事が始まれば、梅も櫻も皆一時に咲きはこる。九月には海へも入れない様に涼しくなつて了ふ。そして林檎が赤くみのる。——故郷と周圍について私はまた書くであらう。——

此處が大體私の詩の背景である。だから私の詩をよく解つてもらへ

るのは北國の人々だ。硝子に出来る朝の結晶や、吹雪に暮れる家並や、道もない夜明けや、閑古鳥の聲や、落葉松の美しい淺緑りなどと仲の良い人たちは私の詩の背景を了解して呉れるであらう。

私の詩でこの郷土色を持たないのは「糧を求める」や「皆の分まで」等主として感情を取扱つた數篇にすぎない。此の詩集は或は一つのストオリーを追つてゐるかも知れないが、それは私が編纂してゐるまで氣付かなかつたものである。作品の配列は主として制作の年代によつたので、類同その他のことを少し考慮したに過ぎない。私は今の詩壇に私の詩のシミラリテーを信じないで安心して之を出さうと思ふ。

此の詩集をまとめるには川崎昇氏の助言と激勵が直接の動機となつ

たので、君が居なければ、當分出す氣持にもならなかつたであらう
印刷に就いては新井豊太郎氏に一方ならぬ御面倒をかけた。あはせ
て深く二氏に感謝する。

私の周囲の事件については、此處に集められたすべてが私の現實の
責任にされては困るものもあるのである。それにしても私は此處で
はじめて物を言ふ様な氣がする。私は長い間身ひとつに秘めておい
たことを、私の青春がむざむざと踏みくだかれた時にも、皆に愚か
しい私を笑はれた時にも黙つておいた事を今始めて、すつかり言ふ
様な氣がするのだ。恐らくある人々はまた嘲り笑ふであらう。私は
その顔が見える様な氣もする。でもある人々は私を理解し讀んでも
くれるかも知れない。少數の友は私の詩集を待つてさへゐてくれる

その爲にばかりでも私は喜んで良い筈である。

此處に集められたものを見てゐて私は涙ぐんでしまつた。何もかもが其處から糸をひく様に私に思出されるのである。之が今までの私の全部だ。なんといふ貧しさだらう。幾年もの私がこんな小さな哀なものになつて了つた。私はまた之からこの詩集を懷にして獨りて歩いて行かなければならない。頼りないたどどしい路を歩いて行かなければならない。私を呼んでゐるものが、待つてゐるものがある様な氣がするのだ。では左様なら。愛惜さはまりない、稚い年月の私の夢よ。其處に繪のやうに浮いてくる人々よ。

大正十五年八月二十三日

縁深い故郷の村で

伊 藤 整

春 日

春の畑に老婆がひとり

土は俄雨と太陽の熱とで氣持よい暖かさを抱いてゐる。

老婆は軟い畑に畝をつくり

黒土の穴に

真白い豆を一つ一つ並べてゐる。

その豆の間違なく萌え出るのを知るものの様に

ていねいに

いつくしみつく土をかける。

この老いたる女と白き豆とに約束あり

夢みる太陽の廻轉するいま

老いたる女と白き豆とに約束あり。

暗い夏

夏の草木は 自分の惱ましい緑に苦しんでゐる。

よしきりは

どんぐひの叢に自分を見失つたのか
けたたましく鳴き續ける。

一夜の雨の風に吹き送られた朝

空はもの悲しい灰色だ。

かつかう かつこうと

哀ないつも獨りぼつちな閑古鳥が

相手を捜して落葉松の林をさまよひ廻つて

村の近所へ一寸出てきたが

又思ひ返して林の奥へ引込んでしまつた。

空氣はつめたく濕り

一重を着た子供らが 鼻をすゝりながら

國道の水溜りに遊んでゐる。

ずつと遠くでは風がごうつと

木や草の葉をゆすつて 寒むさうに吹きまはつてゐる。

人々は泥まみれの道路を眺め

一日家の中でだまつて仕事をしてゐる。

(註)

どんぐり——いたどり

雨の来る前

ざあつとやつて来いよ 夏の雨。

地上のすべてのものは用意してゐる。

山の麓から低くかぶさつて了つた雲よ。

夏の緑はうす暗い蔭におほはれ

物ほしに白いものがかり

燕は黒く曇天の下を飛び交ひ

人は重い頭をして室に居る。

降つて来いよ 夏の夕立。

その時始めて人の目はほつと開かれ
草木も葉をそよがせるのだ。

雨

雨の降る日

私の心は花壇の白い花のやうに
雨にたゞかれて亂れてしまふ。

私は頼るものを知らず

人の心も信じようとはしない。

さびしく荒れた心に眺める

暗い紫の地には 雨が降つて降つて

いつまでも降り續いてゐて

そこに夕方の闇がくると
泣いたあとの様に悲しくつかれて
私は眠るのだ。